

バスフィッシングの有用性と社会的意義

平成14年10月
(財)日本釣振興会

現在、バスフィッシングは多くの若者を中心に広く釣り人や国民に支持され、我が国が古くから有してきた世界に誇れる多種多様な釣り文化の新たな一つとして、定着しております。

このバスフィッシングがもたらす効果は下記に述べておりますように計り知れないものがあると思っております。当会の基本的な姿勢は、棲み分けを推進すると同時に様々な効果が期待できるこの魚を有効活用し、国民、若者の健全な生活・育成に寄与したいというものであります。

1. 青少年に対する健全な育成効果～「野外体験から学ぶことの重要性」

我が国は、昭和30年代からの高度経済成長期以降、環境破壊をはじめ、多くの負の遺産を作ってきたと言われております。中でも、最も深刻な問題は「青少年の教育問題」であると思われれます。子供たちが引き起こす様々な事件や犯罪も環境の変化による自然体験、野外体験の不足からくるものと言われ、文部省の調査報告では、自然体験・野外体験の豊富な子供ほど正義感・道徳観がしっかりと身に付いている（約4倍）という発表がなされています。（後述）

数十年前、国民の身近にあったフナ、ハヤ、タナゴ等の釣り場が、埋め立てや宅地化、コンクリート護岸、水質の悪化などで大きく減少した現在、バスフィッシングは若者にとって最も身近でポピュラーな釣りとして、受け入れられています。

そうしたバスフィッシングには野外体験を通して、「自然とのふれあい」や「命の大切さ」「自分を超越した自然の摂理との出会い」「生き物に対する接し方」等を学ぶと共に若者に不足している「危険予知能力」「判断力」「創造力」が養われるなど、様々な心の障害に悩む現代の青少年の健全な育成に大きな効果を果たし、まさに「生きた教材」と言えると思っております。

2. 「親子のふれあいや絆」や「コミュニケーション力」を深める事に効果

現在の少子化や核家族化、超過密社会の中で、「家庭への引きこもり」「チャット」「テレビゲーム」など、人と人との直接の交流は極力避ける風潮が若者の間に広がっており、若者の社会力やコミュニケーション力の低下が急速に進んでいます。また、「テレビゲームなどのバーチャルからだけでは真の感動は生まれない」と思っております。

そのような中で、近年、バスフィッシングを通して、親子のふれあいや絆、友人や仲間とのコミュニケーションを深める、大きな効果があると言われてい

ます。バスフィッシングを親子で体験した家族から、改めて父親への畏敬の念や家族の絆が深まったと言った報告を多く頂いています。

3．国民のレクリエーションとしての役割

我が国では、釣りは古くから人々のレクリエーションとして、幅広い支持を得、大きな役割を果たして参りました。

近年の宅地化、工業地化、環境破壊、水質汚濁などで身近な釣り場が激減している中であって、多くの子供たちや釣り未経験者にとって、今やバスフィッシングが釣りの入門種であり、海釣りや溪流、アユ、ヘラ等の淡水の釣りへのキッカケにもなっております。

2002年の東京「国際つり博」入場者アンケートにおいて、釣りを趣味としている19歳以下の74.0%が、20歳代では72.0%がバスフィッシングを楽しんでいると答えています。この数字を見ましても、今やバスフィッシングが、子ども、女性、初心者への釣りの入門種であることを裏付けております。当会ではバスフィッシングは手軽なレジャーとして、国民のやすらぎと憩いに大きな効果を発揮すると確信しております。

4．経済効果と地域の活性化に及ぼす影響

バスフィッシングによる地域活性化や経済効果も既に各地で実証されております。現在、ブラックバスが漁業権魚種認定されている山梨県河口湖では、釣り人がもたらす宿泊施設や入漁料、コンビニ、ガソリンスタンド等、年間の経済波及効果が約36億円に及ぶと試算されており、過疎化が進み観光資源に活路を求めようとする地方自治体や地方の自立という意味でも大変注目されております。こうした経済効果は内水面漁業の自立を促進し、地元を活性化させ、バスフィッシングは地域産業としても大きな役割を果たしています。

現在でも、地域振興・自立を目指し、第5種共同漁業権魚種認定の4湖に続いて、全国で数十箇所の漁業組合や観光協会・商工会などがオオクチバスの新たな活用を目指しております。また、提出されている請願書の中には、『湖の中心的な漁業権魚種は、「ワカサギ」です。その湖でブラックバスが初めて確認されてから約20年となりますが、特に食害は認められない。近年、氷結期のワカサギ釣り開氷時のバス釣りとの均衡がうまく保て、尚且つブラックバス愛好者のワカサギ釣りへの参入などもかなり増え、お互いの相乗効果で地域経済の及ぼす経済効果が更に大きくなりつつあります』など記載されております。

5. 釣り人は「水辺の監視人」

現在、バスフィッシング人口は、釣り人全体から見ても最も大きな割合を占めています。全国の地方で、農業、内水面漁業従事者が減少し、過疎化が進み、里地里山の問題が叫ばれている中で、釣り人は地元の方が行かない、目に届かない場所でも自然と直接、向き合い、触れ合ってきました。また、同様に河川、海岸線でのゴミの不法投棄や水質汚濁、魚類の生息、また、水難事故への釣り人の救助活動等、釣り人は多くの貢献を行って参りましたし、意識的か否かは別として、釣り人のマナー等の相互監視や治安面でも大きな役割を担って参りました。

このように『水辺の監視人』として釣り人は、我が国の豊かな水辺環境の保全に大きく貢献していくと思われまます

米国でも、スポーツフィッシングの重要性を大統領自らが毎年、NFA（ナショナルフィッシングウィーク）で次のように宣言します。また、米国でもバスフィッシングは釣種別構成比で、最も高い比率を占めています。

米国のスポーツフィッシング行政

クリントン前大統領が1999年の現職時に、National Fishing Week(全米釣り週間:全米で約60万人の参加)に対して行なったメッセージ(開会宣言)

自然への愛情は、常にアメリカ文化の中心的な要素をなしてきた。我が国の水生・野生生物や、とりまく草原・森林・湖沼・河川・湿地は、国の最大の宝であり大切な資源である。

それらを慈しみ親しむ最善の方法の一つが、レクリエーショナルフィッシングである。レクリエーショナルフィッシングは、あらゆる人達が、しかも平等に真の魅力的なレジャーとして楽しむことができる。

また、素晴らしい自然環境の中で魚とのファイトを通じて忍耐と思いやりを育む機会を与えてくれる。

スポーツフィッシング業界は、国の経済に活力を与え、環境保護に貢献している。

私は、ナショナル フィッシング ウィークを組織し、それに奉仕し支援する人々に託して、アメリカ人にどうすれば貴重な天然資源に関心をもってもらえるかを教示しながら多くの新しい世代に釣りの喜びを教え広めてくれることに期待する。

アメリカ合衆国では、釣りを国民が健全で、しかも、ゆとりある楽しい生活をエンジョイする最良のレクリエーションの一つであると捉え、国を掲げてその振興に努めている。

また、「Hooked on Fishing , Not on drugs」・・・「麻薬にはまらず釣りにはまろう」と言うスローガンを掲げ、青少年の健全な育成の為に、国を挙げて釣り振興に取り組んでいる。

今、子どもたちが自然環境から、ますます遠ざけられようとしています。それだけでなく、今の子どもたちはTVやゲームで家に引きこもりがちになっています。バーチャルからは野外体験から得られる真の感動は生まれません。我々、(財)日本釣振興会は、このように有用性があり、社会的意義のあるバス

フィッシングを一定のルールのもとで子どもたちが堂々と胸を張って出来る環境作りを目指していかなければならないと考えております。

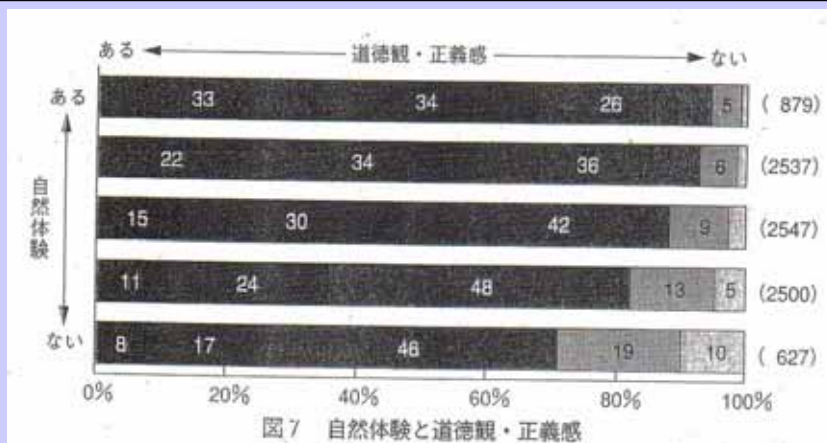
以上

教育・青少年問題

参考資料

自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が身についている

「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」といった自然体験の度合いと、「友達が悪いことをしていたら、やめさせる」「バスや電車で席をゆずる」といった道徳観・正義感の度合いとの関係を、クロス集計したところ、「自然体験」が豊富な子どもほど、「道徳観・正義感」が身に付いている傾向が見受けられた(下図参照)。



出典 ~子どもの体験活動等に関するアンケート調査~
青少年教育活動研究会(文部省委嘱事業)